JN 授業づくりネットワーク
No.33 通巻341号 ネットワーク編集委員会編

2020目前！あなたの授業を変える12のポイント

パート1 あなたの授業を変える12のポイント

1 場づくり
青山新吾／藤田美保

2 協同
阿部隆幸／山田洋一

3 自立
小国喜弘／矢代貴司

4 質問力
長田友紀／井上太智

5 表現力
山崎正明／渡辺光輝

6 ICT
豊福晋平／小池翔太

7 子ども
阿部利彦／月本直美

8 リフレクション
大島崇行／神吉 満

9 授業記録
上條晴夫／長瀬拓也

10 働き方
澤田真由美／杉本直樹

11 研修会
内藤慎治／戸来友美

12 つながる
住田昌治／菊地南央

巻頭対談
アクティブ・ラーニングの前に考えたい
知識を学習するとはどういうことか
今井むつみ×渡辺貴裕

解題
あなたの授業を変えるポイント
石川 晋

誌上レポート
渡辺貴裕氏のストップモーション授業記録
～演劇的手法を用いた学習と学校づくり～
佐内信之

パート2 まだまだ考えたい！あなたの授業を変える8冊
岡本雅弘／赤木和重／川本 敦
本田明菜／村上聡恵／吉田みずほ
藤原由香里／武田 緑

①学びの場づくり

子どもが学びの主人公になるために「箕面こどもの森学園の実践」

未来を創る子どもたちにとって、学びの場はどうあるべきか。フレネ教育の考え方をベースに市民によって創られた学園からヒントを得たい。

藤田美保（ふじた・みほ）

認定NPO法人箕面こどもの森学園校長。小学校教諭を経て大学院に進学し、市民による学校づくりを目指す。2004年に「わくわく子ども学校」（現：箕面こどもの森学園）常勤スタッフとなり、2009年から現職。共著に『こんな学校あったらいいな〜小さな学校の大きな挑戦〜』築地書館、2013年。『気候変動の時代を生きる〜持続可能な未来へ導く教育フロンティア〜』山川出版社、2019年。

	月	火	水	木	金
9:00〜9:20	ハッピータイム				
9:20〜10:00	ことば・かず	ことば・かず	ことば・かず	ことば・かず	ことば・かず
10:10〜10:50	ことば共同		ことば共同	テーマ	
11:00〜11:40	スクールワーク	テーマ	プロジェクト／選択		学習計画
11:40〜13:00	昼休み		ミーティング・掃除	昼休み	
13:00〜13:56	プロジェクト／選択	プロジェクト／選択		全校集会	プロジェクト
14:00〜14:40				プロジェクト／選択	
14:40〜15:00	ミーティング・掃除			ミーティング・掃除	

静かにそれぞれの学習が始まる「ことば・かず」の時間

ある日の高学年（4〜6年生）のクラス。朝のサークル対話（ハッピータイム）の時間が終わると、子どもたちが静かに動き出します。

それぞれが手にしているのは、自分の「ことば・かず（基礎学習）」の計画表と自分が取り組もうと考えているテキストやプリントなど。思い思いの席に座ると誰も何も言わなくても、それぞれが立てた計画に沿って学習を進めていきます。

しばらくすると、「ここわからないから教えてくれる?」とか、「丸付けして」と言って、子どもたちの方から、スタッフに声がかかります。スタッフからの説明やチェックを受けた子どもたちは、再び自分の席に戻り、それぞれの学習を進めていきます。計算をしている人の横で、作文を書いている人もいれば、漢字の練習をしている人や、図形の学習を進めている人もいて、やっている内容は人それぞれです。

この時間は、とても静かで、何か私語をする場合でもヒソヒソ声で話し、話し終わるとまた、学習に取り組んでいきます。

子どもたちは、大人側が大きな声で指示を出さなくても、自分のやることをわかっていて、そこに納得感を持っていれば、自分の意思と力で学びを進めていきます。

本稿では、「子どもが学びの主人公」になるために、箕面こどもの森学園が考えて実践していることについてお伝えできればと思います。

子どもの主体性を育む教育って、どんな教育だろう?

「子どもがいきいきと学べる学校を創りたい!」「子どもの個性や主体性を尊重する学校がほしい」そんな思いから、私たちは、2004年に「子どもが学びの主人公」である「わくわく子ども学校（現：箕面こどもの森学園）」をスタートさせました。

それに先立ち、国内外の学校を視察にいきました。サドベリーバレースクール、シュタイナー学校、きのくに子どもの村学園などなど。そして、参考となる教育方法を模索していたときに出会ったのが、フレネ教育でした。

フレネの教育思想では、「子どもは自分が役立ち、自分に役立ってくれる理性的共同体の内部で自己の人格を最大限に発達させる」*1とされています。

市民による学校づくりを目指していた私たちにとって、学校を社会の縮図ととらえ、子どもたちの主体性の土台の上に市民性が育まれていくというフレネの考え方が、自分たちにすごく合っていると感じ、フレネ教育をベースに子どもが学びの主人公となるカリキュラムを考えることにしました。

自分の学びは自分で決める「学習計画と振り返り」

箕面こどもの森学園では、毎週金曜日に翌週の学習計画を一人ひとりが立てます。そのときにまず大切にしていることは、今週の自分の学びを振り返ることです。

低学年であれば、「ねんどでせいうんを作って楽しかった」「プラネタリウムを見て楽しかった」などですが、高学年や中学生になると、「電池が液漏れしていたから防災リュックの点検って必要なんだとわかった」「1次情報を調べ学習に入れることができたけど、うまく伝えることができなかった」などというものに変わっていきます。

学習内容を振り返るのは子ども本人だけでなく、スタッフや保護者の方もその週の学習に対するフィードバックを子どもたちに伝えます。子どもたちは、自分自身の気づきやスタッフや保護者の方からのフィードバックを参考にしながら、翌週の学習計

＊1　C・フレネ著、宮ケ谷徳三訳『手仕事を学校へ　人民の学校のために』黎明書房、1980年、17頁。

画を立てていきます。

　こうして決められた学習計画は、1冊のファイルに閉じられ、学習室の子どもたちが手に取りやすいところに置かれます。

「あれ〜。次、何するんやったけ？」次の学習時間に自分が取り組むことが分からなくなると、子どもたちは、真っ先に学習計画のファイルを見に行きます。

　そして、「あ、そうやったな」などと言いながら、いそいそと自分で学習の用意を始め、取り掛かっていきます。

興味関心・自己決定からはじまる学びが自分軸を育む

　学園のカリキュラムは、子どもたちの興味関心・自己決定が反映されるしくみになっています。学習内容は、大きく「ことば・かず（基礎学習）」「テーマ学習（ワールドオリエンテーション）」「選択プログラム」「プロジェクト学習」の4つがあります。子どもたちは自分の興味関心を大切にしながら、それぞれの学習内容を決めたり、選んだりすることができます。スタッフは、それらの学習内容が子どもたちの世界を広げていくものになるようにサポートしていきます。

　今学期の中学部のワールドオリエンテーション（テーマ学習）では、「水」について学んでいます。初めは、クラス全員で水について様々な観点から学んでいくのですが、それを受けて、自分の興味関心のあることを一人ひとりが追究していきます。

　農業に関心のある人が「世界の水紛争」について専門家の方にインタビューなどをして学んでいたり、古代ローマの水道のしくみに興味を持った人が、水道の歴史について調べていたりします。

　こうした自分の興味関心に応じて、自分で学習内容を決めていくことができる経験を積み重ねていく中で、子どもたちは、自分の内を見つめ、自分と向き合い、自分軸をもつ人へと育っていきます。

振り返るたびに、自分と向き合う

　学園では、子どもが学びの主人公になるために、子どもたち自身が学習を自己決定できる環境が整えられていると同時に、自分を見つめ自分と向き合っていく機会もたくさんあります。

　毎週の学習計画はもちろんのこと、毎月のことば・かず（基礎学習）の学習計画、学期ごとの目標と振り返り、各学習や行事終了後にも振り返りがあります。

　数ある「振り返り」の中で、子どもたちが一番力を入れているのが学期ごとの振り返りです。高学年や中学部ともなると、2時間以上も時間をかけて、用紙にびっしりと細かい字で振り返りを記入する人が多いです。

「今学期も言いたいことが言えたと思う。他人の意見を否定もせず、自分の意見を言うことを大切にしたい」「前に進まなくてもいいから、今を生きる。今、自分のまわりにあるものを大切にする」

　こうした子どもたちの記述からは、自分を見つめ、自分と向き合って学んでいく積み重ねの大切さを教えられる思いがします。

子どもが学びの主人公になるために大切だと思うこと

　本稿では、子どもが学びの主人公になるために、自分を見つめ、自分と向き合い、学びを自己決定していることと、その学びをいろんな機会に振り返っていることをお伝えしましたが、そのこと以外にも大切にしていることがあります。

　まず、土台となるのが、子どもたちの自己肯定感を育むこと。そのために、毎朝自分の話したいことを話せる「ハッピータイム」、自分の伝えたいことを伝えられる「自由作文」、自分の好きなことができる「プロジェクト学習」、自分がみんなに役立つことを実感できる「行事」があります。

　自己肯定感をもち、自己決定していく学びは、一方的な知識の伝達ではなく、スタッフと子どもたち、子どもたち同士の双方向の「対話」で行われます。

　こうした学びの積み重ねの中で、子どもたちは、「自分も人も大切にする」ことを学んでいきます。学年があがっていくにつれて、その「人」の範囲は、どんどん広がっていきます。始めは、家族や友達だったのが、自分がよく行く公園のことや同じまちに住んでいる人のこと、さらに日本のことや、世界のことにまで広がっていき、持続可能な社会を創ろうとする人になっていきます。

　学びの場づくりのあり方を考えるときに大切なことは、子どもたちという苗木の周りに、1枚1枚落ち葉を落として腐葉土を作るようなイメージで、日々小さなことを続けていくことです。

　子どもたちが学びの主人公となりそれぞれの学びを積み重ねていくことは、これからの未来を創っていく営みだと言えるでしょう。